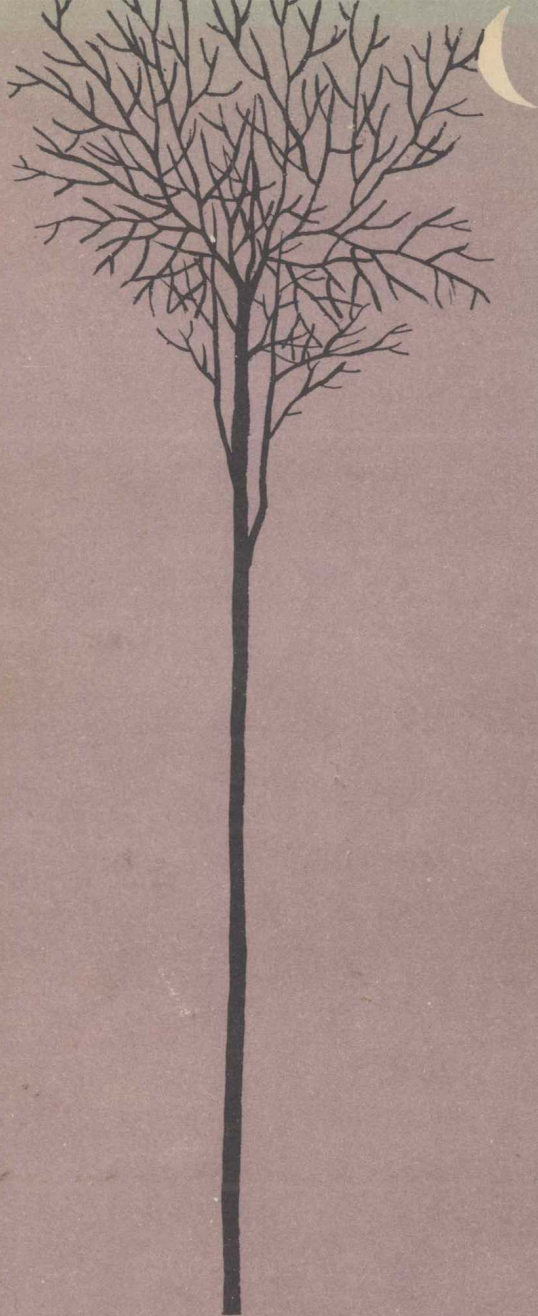
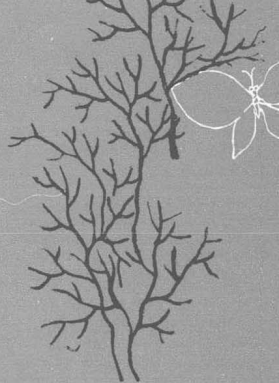


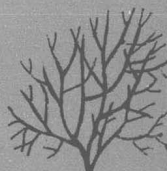
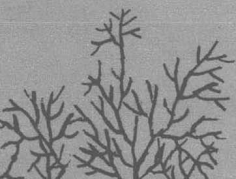




夜の挨拶

樹下太郎

東都書房



〔著者略歴〕大正10年東京に生る。市立京橋商業学校卒業後会社員生活を経て18年より3年間華中にて軍隊生活を経験、21年復員、戯曲放送脚本などを書く。24年福音電機KK入社。33年「宝石＝週刊朝日賞」佳作入選、34年長編「最後の人」を東都書房から刊行、35年代表作集「散歩する霊柩車」(東都書房)を上梓、同年9月会社勤めをやめて執筆に専念現在に至る。現住所、東京都板橋区常盤台3丁目5番地。

夜の挨拶

定価260円

昭和35年10月15日 第1刷発行

著者 樹下太郎

© Taro Kinoshita 1960

発行者 黒川義道

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 加藤製本工場

発行所 東都書房

東京都文京区音羽町3丁目19番地
電話 (941)3111振替 (東京)72732

落丁本乱丁本はおとりかえします

目次

第一章 新製品委員会

第二章 夫の会社

第三章 聴取

第四章 傾城

第五章 二人目の死

第六章 夜の挨拶

あとがき

裝
幀
真
鍋

博

夜
の
挨
拶

第一章 新製品委員会

1

まず、私を語ろう。

一時、インテリやくざ、という言葉が流行しかけたことがある。インテリ出のやくざ、ではない。れっきとしたサラリーマンだが、ちょっと考え方がちがうのだ。かれらをほかの仲間とはつきり区別しているのは、出世欲を全然もたないということだ。出世しないことを苦しんだり、ひがんだりしない。すべてを運命なのだとわりきっている。——たしかにそうかもしれない。サラリーマンの能力なんて、上と下とでそう大したひらきはないのだから。

栄達に狂奔している仲間たちを傍観者の眼で眺めている。

しかし、だからといってかれらは、決して怠けたりはしない。なすべき仕事はきちんとやっただけなのだ。義務は果さなければいけない。それによって食っているからだ。そして、与えられた以上の仕事を決してやらないのもかれらの特徴だ。むしろ誇りですらある。——たとえば上役

の欲しているグラフは一枚なのに、それになにかを添えてお手柄にしようとする精神が不潔に思えるのだ。お手柄にしようという気持ではなかったとしても、誰かにそう思われたら同じことなのだ。かれらは、きびしく潔癖であつた。

帰りのタイムカードを捺した途端、会社のことは忘れることにしている。かれは純粹なかれ自身になりきるのだ。かれは自分の喜びを苦しみを、自由に喜んだり苦しんだりする。翌朝、タイムカードを捺すまでの時間を。

会社にいるときのかれらを、動物の檻の中の熊にたとえていいかもしれない。熊よりはましてあつた。熊は閉園後も檻の中へ閉じこめられたままなのだから。これは少し強烈すぎるたとかも知れない。か、一部のサラリーマンにとって会社は全く檻そのものであることも事実なのだ。インテリやくざは檻を意識している。だから、檻の中では従順で無抵抗だ。自分の力ではどうにもならないことを知ってしまった男たちなのだ。

インテリやくざは、だから、サラリーマンの野心や希望のたよりなさを身に沁みて感得した三十五歳以上の男たちに多く見受けられる。

そして、その年齢の男たちのほとんどが、戦場の体験をもっていることにも、それは関係があるだろう。戦場では、死ぬやつと生き残るやつか、ほんの紙一重の差の運命であつさりよりわけられてしまったのだ。

……かれらの人生観のなかに、「運命」はもっとも大切な場所にてんと坐りこんでいる。後輩に追い抜かれても、あいつは運がよかったのさ、てあつさり片付けてしまう習性を身につけてし

まっている。

インテリやくざは、だから、自分を敗北者だとは夢にも思っていない。やらせてみる、誰にも敗けるものかという自信が肚の底に潜んでいた。

自信をもちながら、ただ、運命に抗う勇氣をもたなかった。

檻の中で与えられた仕事を、正確に、迅速にやっていた。考えることといえば、今日の昼飯をなににしようかということだけであった。

ところで私に就いていうなら、私はインテリやくざではない。インテリと呼ばれるには私の学歴は貧しく、サラリーマンと呼ばれるには少しはかりすけた存在なのだ。旧制工業を卒業しただけの、小さな工場の技術者で、日曜も月に一度は出勤しなければならぬような境遇に置かれている。

誤解しないでほしい。これは自嘲でも劣等感でもない。私はそれを極端に嫌っているのだから。

では、なぜ、インテリやくざの話など持ち出したのか。

三十七歳のとき、多田敬吉か私の上役になったからだ。多田は私より十も年下で、しかも私は大学を出たばかりのかれを毎日のように叱りとはした記憶があるのだ。当時、私は幹部気取りだったのだ。会社の規模もいまよりずっと小さかった。

ふしぎに私のなかに屈辱やわだかまりはなかった。三度目には、多田を「課長」と呼ぶことになんかの抵抗も感しなかった。私は世の中の仕組みの皮肉さ、運命のつくり出すお芝居の見事なば

からしさに驚嘆しただけであった。

なにもかも運命で割切ってしまうインテリやくざにひどく共感を覚えた。

そうなんだ、なにもかもこんな具合で……これが運命なんだ……。

それよりさき、同僚の佐伯さへきに敗けたとき屈辱と劣等感に苦しめられたのがうそのように思い出された。運命だと思えばなんでもないことじゃないか。——おれだって特別に出来の悪い男じゃないんだし……。

佐伯に敗けたときから二年と経っていなかった。その歳月のうちに私は豁然と悟りをひらいてしまったのだろうか、私自身も気がつかないうちに……。

多田は多分に私の存在を意識していたらしく、新しい課長の椅子に坐ったとき、甲冑かちうを身につけていた。だからかれは私の柔軟な態度にあらうと啞然あぜんとしたらしく、そのとまどいの様子か私にははっきり読みとれた。

運命は、一面麻葉であった。ひと言「運命」と口にすると、あらゆる劣等感、屈辱、憎悪、その他私の氣にいらぬものもろもろが、たちまち私からとび去ってってしまうのた。

たたし、誤解しないでほしい。

「これか運ってやつなんだな」というせりふは、決して陰気なじめしめた声で私の口から吐き出されなかったということである。

「これが運ってやつなんだな」

私は、自分自身をいつわることなく、口笛でもふきたいような明るい声でそれがいえる男に

なっていたのである。

万一、幸運の場合でも、私はおそらく同じ表情、同じ声でいうにちがいないと信じていた。

「これが運ってやつなんだな」

——ところがそうではなかった。

不運なとき口にする「運命」が麻葉なら、幸運はたちまち快い酔いを発する強い酒であった。見苦しい程、一瞬のうちに酔ってしまったのだ。

幸運という程の幸運ではなかったのだ。ただ私にとって、復員した年、二枚の宝くじで百円とワイシャツ生地を一度に当てて以来、十数年ぶりに訪れたことで、まさに画期的だったのだ。格別な不運はなかったが、幸運にはついぞ恵まれなかった、なまぬるい十数年だったということでもある。

2

昨年、四月一日のことである。

朝十時頃、社長室に呼ばれた。

社長は微笑て私を迎え入れた。

社長室は事務室の一部をベニヤ板で改装した安っぽい部屋だったが、明るい緑白色の水性塗料で化粧されていて感しは悪くなかった。

社長の左手にあるものを私は眼ざとく視野のなかにいれていた。丸められたまま握られているそれはどうやら辞令らしかった。

おれをよそへ移すつもりなのだろうか。

「今度、きみに重要な位置についてもらうことになった。しっかり頼むよ」

無造作に社長は手にしていたものを私の前へつき出した。

ひと眼見たとき、私はエイプリルフルではないかと疑った。

今朝、女房にしてやられたばかりであった。

「あら、あなたたったらおねい、よしたのね！」

「えっ？」

私は布団の中で思わず股間に手をあてた。

子供のいない夫婦だったから、ときどき、こんな子供じみたいたずらを愉^{たの}しむのだ。

……もう一度、読み返した。一字、一字、丹念に読んだ。

企画課長ヲ命ズ

はつきりそう書かれていた。いままで私は業務課企画係主任だったのだ。主任だが部下はひとりもいなかった。創立当初からの古参なので、会社でそういう待遇にしてくれているのだと思っていた。

「きみも承知のように、いままでの行き方では、うちの会社も発展は望めないのだ。それどころか先細りになる可能性がある。そこで、思いきって新しい製品をどんどん問屋へ送り込もうということにきまったわけなんだ」

「はあ」

「新しい製品といったところで、まるっきりちがったものを造ろうというわけじゃない。お客がとびつくような、新しいものを狙おうというわけさ」

「はあ、わかります」

「それにはまず企画を充実させなければならぬ。そこで企画課を新しく独立させることにきまったわけなんだ」

「……………」

「きみを課長にしたのは、永年の経験を買ったのだ」

わかるね、というあたたかいまなざして私の眼をのぞきこむのだ。

「といって、きみにアイデアを生み出してもらおうという意味ではないんだ。きみの豊富な経験で、そのアイデアがものになるかどうかを検討してもらおうと考えたわけだ。わかるね？」

「はい……………」

「重要なポジションであるということも判ってくれるね」

「ええ、それは、もう……………」

「さし当り工場の技術者を二人つれてきて、きみの部下にするつもりだ。成果次第ではどんどん

人員をふやしていく予定だから、ひとつ、頑張ってくれたまえ」

「はい、やれるだけやってみます」

「期待しているからね、石上君」

だらしない話だが、私は、社長室から自分の席へどう戻ったか記憶がない。四十二歳にもなってから課長になったのかなぜそんなに嬉しいのか、といわれそうだが、事実、私は突然の幸運に酔ってしまったらしいのだ。

「石上さん、お目出とうございます」

タイピストの目代加代子めいがかよこが祝辞の一番バナーだった。彼女は人事課に所属しているから、今度の栄転をおそらく私より先に知っていたのたろう。

ひとりてに私の顔の筋肉かゆるんでいた。

やっぱり嬉しいのだった。

たかが小さな会社の課長になったぐらいで。――裏側の私がそんな私を嚙かっていた。それも後輩に追い抜かれたあとを追って、やっと追いつけたというだけのことじゃないか。

それでいて晴れがましい微笑が自分の表情からいつまでも立去らないのに、私は驚いていた。他愛のないおれだな。

インテリやくざのドライなわりきり方に共鳴していたおれはいつどこへいってしまったのだ。不運に動じないように、幸運にも動じないはずのおれだったではないか。

考えてみると、喜んで当り前の話だった。とにかく月収が三千円ちがうのだから。三千円の昇

給と同じことなのだ。私が口惜しいのは、私の喜びが三千円をはるかにつき抜けているところであつた。

全くおれというやつは……。

家へ帰るまでの時間を待てなかつた。便所へ行くふりをして外へ出た。たばこ屋の店頭で妻の勤め先へ電話した。

「おい、課長になつたよ。企画課長だ」

「だめ！ ひっかからないわよ」

エイプリルフルたと思ひ込んでいる。

「ちがうよ、ほんとなんだ。辞令だつてちゃんともらつたんだ」

「電話じゃ見えないわ」

「賭けてもいい」

「いくら？」

「三千円」

「大きく出たわね」

「どうする？」

少し沈黙の間があつた。五秒ぐらいか。

「ねえ？」

「うむ？」

「ほんとなのね」

「うん……」

「よかったわね」

結婚してから十三年経っていた。妻の嗅覚は私の短い言葉から敏感にさとしたらしい。

「よかったわ、あなた……」

しみじみと繰返してから、わすかにききとれる声でつけ加えた。

「今晚はあたしの方かおね、よしそうだわ」

「よせやい」

妻は華やいた声で笑い、さようなら、と電話をきった。

子供かいないので、妻は、半分は退屈しのぎで、自宅の近くの町工場の事務員をしていた。私より八つ年下である。

生活は、だから、同年輩のひとたちに比へて気楽な方であった。

平穩無事な毎日であった。

子供のいないのを淋しいと思うこともあるか、夫婦ともそれ程子供好きではなかった。二人とも赤ん坊の泣き声をきくといらいらする質であった。

子供の生れない原因は妻にあった。そのひげ目からか、妻は私の酒好きに就いて寛大であった。晩酌はサントリーの角瓶。晩酌とはいいい条、私の場合量が多かった。一週間に二度はふっ倒れるまでのむ。胃を労る意味で水割りにするのだが、却ってそうしてから酒量がふえたようだ。